

# 歌曲の祭典 歌田の峯前

2023年 1月7日(土) 開演 13:00 開場 12:30

洗足学園音楽大学 シルバーマウンテン 1F

△新型コロナウイルス感染症の感染拡大を防ぐためのお願い

- ・マスク着用の徹底、こまめな手指消毒・手洗い・咳エチケットの励行にご協力ください。
- ・大声や対面での会話はお控えください。
- ・演奏者への声援はご遠慮いただき、拍手のみとしてください。
- ・休憩時、終演後はスタッフが扉を開けるまでお待ちいただき、空いているドアから混雑を避けて入退場してください。
- ・客席内やロビーでのご飲食はお控えください。
- ・出演者への面会はできません。出演者への花束・プレゼントもご遠慮ください。
- ・万一、集団感染の発生が明らかになった際は、保健所に入場者の情報を提供する場合がございます。

主催：洗足学園音楽大学・大学院

## ✿ プログラム&解説 ✿

### 【第1部】

#### イタリア歌曲研究1

指導教員 相田 麻純 / ピアノ 立石 智子

G.ロッシーニ 非難 *Il rimprovero(Metastasio)*

清水 利浩(2年)

題名の「非難」らしくない軽さを持った明るい前奏から始まりますが、音楽は徐々に盛り上がりを見せ、最後は情熱的に終わる曲です。ある女性を愛しているのですが、相手はそれを拒否している状況にあります。しかし愛さずにはいられないほどの想いがあり、もがき苦しんでいます。歌唱旋律には音の強弱やアクセントが多くみられ、愛する感情が多分に表現された音楽となっています。否定の言葉である“*No*”が何度も繰り返されているのが特徴的です。

G.ロッシーニ 亡命者 *L'esule(Torre)*

伊藤 茜璃(2年)

曲名の通り、祖国を逃れることとなった「亡命者」の心境を綴った歌です。曲の前半では、亡命してきた土地の情景を短調で歌うことで祖国イタリアから離れた亡命者の寂しさが表現されています。“*ma questo suol non è la Patria mia* この地は私の祖国ではない”という歌詞が印象的に何度も繰り返されます。しかし後半は長調に転調し、歌唱旋律や伴奏の音形にアクセントが付き、イタリアを誇りに思う気持ちが言葉と共に情熱的に歌われます。

G.ドニゼッティ 糸巻き *La conocchia(Pidera)*

關 華乃(2年)

グリゼットと呼ばれるお針子などの内職をする下層の労働者階級である“私”が、好きな人のことを楽しく話している様子が描かれた曲です。アクセントを伴った付点のリズムや音の跳躍には、恋をして心が躍る様子が表現されています。しかしお金持ちの男性に恋をしても成就する可能性は無いに等しく、この事実を思い出す曲の後半では低音が続いたり、最後には溜め息を表すようなオクターブの跳躍がみられ、叶わぬ恋の辛さが表現されています。

G.ドニゼッティ 遙かに *La lontananza(Romani)*

荒井 葉月(2年)

1837年に出版された歌曲集『インフラシャータの秋の暮れ』の第1曲目に収められているナポリ風アリエッタです。分散和音の軽やかな伴奏の上に、流麗に心をこめて歌われます。愛している人と両想いでなくなった今、“自分は他の人に愛情を移すことは出来ないが、耐えるだけなら苦悩になる”と訴えています。曲の後半部分では様々な音形で“*Oh!Caro amor* おお、愛しい人よ”と何度も訴えかけ、彼女を諦めきれない想いが溢れています。

G.ドニゼッティ 愛と死 *Amore e morte*(Redaelli)

齋藤 あいひ(2年)

日本語で「愛と死」と訳されるこの曲は、死を目前にした一人の男による独白を歌ったものです。短調を基本としたシンプルな旋律で、かつて心を寄せたエルヴィーラという名前の女性へ静かに言葉を紡ぎますが、男の語りには突如として現れる長三和音の明るい響きによって締めくくられます。これは彼の言葉にある通り、たとえ自らの死が彼女を苦しませる記憶になろうとも、彼女の心に自分の存在を残せるのであれば、それが彼にとってのせめてもの希望であるということを表現しています。

G.ドニゼッティ ジプシーの女 *La zingara*(Guaita)

中村 文美(2年)

ジプシーの女性が自分の生い立ちをリズムカルで印象的なメロディーに乗せて歌った曲です。曲冒頭で自分を「La zingara ジプシーの女」と名乗る部分ではフォルテとアクセントが充てられ、彼女の力強く芯のある性格が感じられます。後半部分ではそれまでの曲調から一変し、ゆるやかで流れるような音形がみられます。この部分では素敵な男性に一目惚れしたことを語っていて、揺れ動く恋心が“ah!”という感嘆詞と共に複雑に上下する音形に表現されています。

ドイツ歌曲研究 1

指導教員 飯田 千夏 / ピアノ 石田 多紀乃

W.A.モーツァルト すみれ *Das Veilchen*(Goethe)

遠藤 香(2年)

1785年作曲。ゲーテのジグシュピール〈エルヴィンとエルミーレ〉の中からとられた詩に、物語風に展開される通作歌曲形式で作曲。野に咲く小さなすみれの健気な恋心を歌っている。ゲーテの原詩はすみれの恋はかなわず、息絶えてしまうところで終わるが、モーツァルトは原詩“Das arme Veilchen. Es war ein herzigs Veilchen”を付け加え曲を締めくくっている。これにより“すみれの死”に対して深刻にならず、すみれに憐れみを感じさせてくれている。

F.シューベルト ます *Die Forelle*(Schubart)

田村 萌羽(2年)

1817年作曲。鱒が清流を泳いでいるのを岸辺で眺めていると釣り人が現れ、鱒を釣ろうとする。水が綺麗なうちは針にかかるまいと思われたが、釣り人はわざと川の水を濁し、鱒は釣り上げられてしまう。自由への賛美と自由への憧れが歌われており、軽快な旋律や生き生きと流れるように動くピアノが、鱒の跳ねる様を表している。速いテンポや印象的なメロディ、鱒が釣り上げられる場面では曲調が変わるなど、詩の内容に即して音楽が展開し、興味を引き立ててくれる一曲である。

F.シューベルト 君は安らぎ *Du bist die Ruh*(Rückert)

北田 瑞葉(2年)

1823年作曲。リュッケルトによる恋人への愛着、恋人たちの理想と平和を東洋的な手法をもって神秘的に表現した抒情詩集〈東方のバラ〉の中的一篇。私の心をあなたで満たしてほしいという献身的な愛を歌った曲である。歌の旋律やテンポから静けさや安らぎが感じられる。のびやかで平和な優しさ溢れる曲である。

R.シューマン 「ミルテの花」より はすの花 *Die Lotosblume*(Heine)

北野 海晴(3年)

1840年作曲。歌曲集『ミルテの花』の第7曲目の作品である。はすの花が昼間の太陽を恐れており、夜になって月が出ると、月に会えたことに喜びを感じているという曲である。テンポがゆったりした、穏やかな曲調の作品で、前半のピアノパートでは、左手の旋律が、はすの咲く暗い水辺の様子を表している。後半では、夜になって月が出た時のはすの様子が描かれている。曲の終盤“Sie blüht und glüht und leuchtet”から次第にテンポが速くなり、はすの花が月に会えたことに対する喜びが表現されている。『ミルテの花』はロベルトから妻のクララに捧げられた歌曲集であるため、月はロベルト、はすの花はクララを指していると思われる。

R.シューマン 「ミルテの花」より きみは花のように *Du bist wie eine Blume*(Heine)

岩井 彩実(3年)

1840年作曲。『ミルテの花』はシューマンが結婚式の前日に妻となるクララへ捧げた歌曲集で、この歌曲集にはクララへの愛が感じられる。曲の終盤“betend, daß Gott dich erhalte „の歌の部分は大きく音に変化することはないが、ピアノ伴奏が歌を引き継ぐように高音へと向かい、神への切なる祈りが表現されている。全体的に緩やかで言葉を大切に歌い、ロベルトのクララへの愛の気持ちを美しい旋律と共に伝えたい一曲である。

R.シューマン 「ミルテの花」より ブライカの歌 *Lied der Suleika*(Willemer)

中森 優衣(3年)

1840年作曲。ドイツの文豪ゲーテとマリアンネ・ヴィレマーという女性はお互いに恋をしており、手紙上マリアンネはブライカ、ゲーテはハーテムと名乗り文通をしながら相聞詩を送りあっていた。この曲は、ブライカがハーテムの手紙を見てハーテムへの愛しい気持ちを手紙に綴っている様子が描かれている。“Daß er ewig”から声部は半音進行で上行し、それに伴いピアノの和音も3度で上行していく。これらの音形から、ブライカがハーテムのことを想い、気持ちが高揚している様子が感じられる。

R.シューマン 「詩人の恋」より 昔の悪しき歌どもや *Die alten, bösen Lieder*(Heine) 菊地 健太(3年)

1840年作曲。ハイネによる〈抒情的間奏曲〉より16篇の詩を選び『詩人の恋』と題した連作歌曲の終曲。愛の喜びに始まり失恋の痛みを経て、終曲では今までの苦悩や悲しみ、心の痛みも全て深い海へ葬りさるという内容。曲を通して奏されるスタッカートやアクセント、音の力強さ、調性、オクターブ上がるフレーズなどから、主人公である詩人の心の内が感じられる。後奏では第12曲「Am leuchtenden Sommermorgen」の後奏が再現され、その美しいメロディから詩人が次に出会うであろう何かを予感させてくれている。

## 日本歌曲研究1

指導教員 柳澤 涼子 / ピアノ 皆川 純一

中田 喜直 / 堀内 幸枝・詩 ひなの日は 松本 一恵(3年)

この曲は、凍っていた水が溶けて、真っ白な蝶々が舞う暖かい春の季節に、少女が「あのひと」にきれいな自分を見せてびっくりさせようと、平安朝の乙女みたいに着飾り会いに行く、春のふんわりとした空気を感じさせ、はずむ乙女の恋心を書いた歌であり、伴奏もそれに合わせた優雅で美しいハーモニーで構成されている曲になっています。

柴田 南雄 / 立原 道造・詩 「優しき歌」より 爽やかな五月に 雨森 あかね(3年)

歌曲集『優しき歌』(1946~48)の第二曲目。この曲は相手を泣かせてしまった後悔のような不穏な前奏から始まる。目の前で涙を流している相手を見ても、涙を拭うことも声をかけることも出来ない。曲の中間部分で調とピアノのニュアンスがガラッと変わり、思い出の中の相手を見ながら優しく語りかける。だが、やはり自分の相手への至らなさ、そしてその思いを相手に伝えることの出来ない辛さが曲の後半部分にかかっている。

## フランス歌曲研究1

指導教員 寺島 夕紗子 / ピアノ 服部 真由子

J.マスネ エレジー *Élégie*(Gallet) 矢嶋 愛実(3年)

“幸せだったあの情景を再び見ることも出来なければ、貴方も消え去ってしまったのだ…!”100%悲しみに満ちたこの歌詞にマスネが初期に書いたこの曲が、よりセンチメンタルな雰囲気醸し出しています。元々マスネはピアノの独奏曲として作曲しました。旋律の美しさが悲しみを引き立たせています。後に歌曲へと発展しマスネの有名曲のひとつになりました。特徴的なオクターヴの進行がより悲壮感を掻き立てますので、是非注目してお聞き下さい。

E.ショーソン 蜂雀 *Le colibri(Leconte de Lisle)*

小原 清香(3年)

南米に生息している小さな鳥ハチドリが花の蜜を吸って生き、飲み干すほどに蜜に酔いしれてしまうという様子を、恋人との初めてのくちづけになぞらえて描いている。3連符が多く用いられ言葉や音楽が柔らかく繋がり、フランス歌曲特有の優しく綺麗な音色を楽しむことが出来る。さらに、5拍子の曲となっていることが最大の特徴であり、臨時記号による神秘的な世界観と温かみのある重厚な伴奏の旋律も味わうことが出来る一曲である。

E.シャブリエ 幸福な島 *L'île heureuse(Mikhaël)*

高岡 未侑(4年)

この詩は、18世紀の宮廷画家ヴァトーの雅宴画〈シテール島への船出〉から触発され、恋人たちが喜びに満ちた場所を夢見て、入江から大海原、そして幸福の島へと進んでゆく様子がエフライム・ミカエルによって描かれている。波を切って海を進む様子が伴奏で豊かに表現されており、それに合った美しい旋律が心地よい。”心ゆくまで愛し合おう”と歌う二人の幸せな姿、風景が浮かび上がるロマンチックで愛溢れる楽曲である。

♪ 休憩 ♪

## 【第2部】

ドイツ歌曲研究2

指導教員 馬場 由香 / ピアノ 西川 麻里子

G.マーラー 春の朝 *Frühlingsmorgen(Leander)*

井上 ころこ(4年)

春の風を吹かせる前奏が響くと、愛を象徴とする花いっぱいのリンデの木がお寝坊さんに“起きてよ!”と優しく囁く。鳥のさえずりに耳を澄ますと、生き物たちが次々と目を覚まし、“ほら!あの元気なあなたの恋人もいるよ”という声に一瞬、胸が高鳴る。包み込むような優しい呼びかけに少し眠そうなピアノの返事が聴こえる。春のそよ風や生き物たちに恋心など、様々な情景を表現していくピアノの音色と歌との会話が聴こえてくる。

R.シュトラウス 献呈 *Zueignung(Gilm)*

宮根 千翔(4年)

ドイツの後期ロマン派を代表する作曲家、R.シュトラウスによって、1882年頃に作られた作品。この曲は、歌曲集『8つの歌』の第1曲目であり、恋人への想いと感謝を詠っている。冒頭から三連符が波打つ伴奏は、恋愛の複雑さが表現されており、清らかな音楽から次第に感情が大きく膨らんでいく。これ以上ないほどの盛り上がりの中で曲が閉じる。真の愛に目覚める様子を表現しながら歌っていきたい。

R.シュトラウス あなたは私の心の王冠 *Du meines Herzens Krönelein(Dahn)* 高村 美友(3年)

1888年に作曲された『5つの素朴な歌』Op.21の2曲目である。愛する人を王冠やバラの花に例え、その人の優美さを讃えている詩である。モーツァルトを思わせるような曲調だが、シュトラウス特有の転調がシュトラウスらしさを醸し出している。この曲に関する逸話として、山田耕筰が作曲した「この道」にメロディーが似ているため、山田耕筰がドイツに留学をしていた際に影響を受けたのではないかとされている。

R.シュトラウス 何もない *Nichts!(Gilm)* 小林 瑠菜(3年)

1885年作曲。ヘルマン・フォン・ギルムの詩に作曲したシュトラウスの最初の歌曲集『最後の葉(Letzte Blätter)』による8つの歌曲の1曲。特徴のある前奏からはじまり、皮肉たっぷりな歌い出しと、ゆっくりな中間部分の対比が明確であり、最後の部分で急激な曲の結び方をする。ユーモラスで快活な曲だが、美しいメロディーもあり、一曲の中の変化が印象に残る曲である。

R.シュトラウス 万霊節 *Allerseelen(Gilm)* 行場 結佳(4年)

シュトラウスの初めての歌曲集である『“最後の葉”による8つの歌曲』の第8曲目。

万霊節とは11月2日、カトリック教会では“死者の日”と定められ、すべての死者の魂に祈りを捧げる日とされる。今は亡き恋人を想い、“かつての五月のように私の胸に帰ってきてください”という愛と清らかな美しさに満ちた曲である。“かつての五月のように”という言葉が印象的に使われているが、ヨーロッパでは5月に一斉に緑が芽吹き、春が訪れることから特別な月とされる。

H.ヴォルフ 「イタリア歌曲集」より 小さなものでも

《*Italienisches Liederbuch*》 *Auch kleine Dinge(Heyse)*

佐々木 遥(4年)

『イタリア歌曲集』はH.ヴォルフが1890年から1896年まで、6年もの年月を費やして作曲した計46曲からなる歌曲集であり、この曲はその第1曲目にあたる。A durの暖かくも繊細な音楽に乗せて、“真珠やオリーブの実、薔薇の花にも価値が見出されているように、たとえ小さくても美しさや尊さがあるのよ。”と、そっと語りかけている。ヴォルフの感受性豊かな人間性や歌曲に対する愛情をも伺えるこの曲は、心に寄り添う様に大切に歌いたい。

F.メンデルスゾーン もう一つの五月の歌 *Andres Maienlied(Hölty)*

菅原 智里(4年)

1820年に作曲された歌曲集『12の歌』の第8曲目。第7曲目に「五月の歌」があるため、この曲は「もう一つの五月の歌」となった。また別名「魔女の歌」とも呼ばれる。春が訪れ、ブロッケン山の舞踏会に行くのを心待ちにしている魔女の様子が、おどろおどろしいピアノの前奏から始まり、早口な歌詞、また度々出てくる半音階での進行が不気味さを最大限に引き出している。さらに、最後の音の跳躍では、気持ちが高揚している様子が描かれ、メンデルスゾーンの歌曲の中ではドラマティックで楽しい作品になっている。

イタリア歌曲研究2

指導教員 高田 正人 / ピアノ 谷川 明

P.マスカーニ 月 *La luna(Menasci)*

河村 未奈(4年)

この曲の作曲者であるマスカーニは度々メナッシの詩に曲をつけており、彼らの代表作である《カヴァレリアルスティカーナ》もその一つである。この曲は男性が太陽=愛に満たされている様子、月=失恋している様子に例え少女へ愛について語りかけている。拍子の変化や速度指定が細かくあることによって月=愛への憧れ・切実な思いを幻想的により効果的に表現されている。

S.ガスタルドン 禁じられた音楽 *Musica proibita(Gastaldon)*

鈴木 諒汰(3年)

禁じられた歌は、夜毎バルコニーの下から聞こえてきた愛の歌を指している。甘美で魅力的な歌が聞こえてきたが、母はその歌を歌うのをなぜか望まなかった。しかし、母がいないとき、彼女は自分の心を震わせたあの歌を歌いたいと思う。曲の後半は男性の視点なら、好きな女性へ捧げる歌を歌う。歌詞の内容も情熱的で、自身の愛をストレートに表現している。彼女の母に禁じられてもなお、毎晩愛の歌を歌い彼女を魅了させる。

P.トスティ さようなら! *Addio!(Whyte-Melville)*

中西 美友(3年)

この曲は英語の詩〈Good bye!〉にトスティが曲をつけた作品であり、別れた愛する人への想いが切々と込められている。1番では、枯れ落ちる木の葉や海に立ち込める霧など、愛する人と過ごした夏が過ぎ去っていく情景が描かれている。そして、曲の終盤にむけて離れてしまった愛する人への想いが溢れ、最後は曲のタイトルにもなっている「Addio」永遠の別れが熱く謳われている。



A.カゼッラ 「14世紀の3つの歌」より 美しい鳥籠から…

*Fuor de la bella gaiba…* (作詩者不明)

福田 真桜(4年)

『14世紀の3つの歌』の第2曲目。鳥籠から鶯が飛び立っていく様子が描かれた伴奏から始まる。逃げてしまったことに気付いた子供が嘆き、不安を抱え、”誰が籠を開けたのか”と問いながら辺りを探すも見当たらない。場面は森へと移る。鶯を探しに彷徨う男の子の重たい足取りと怯えた心が間奏から感じられる。鳴き声が聞こえ、近くにいる鶯に私の元へ戻ってくるよう問いかけるも、更に遠くへと飛んで行ってしまふ。身近なものを失ってしまう喪失感が描かれた曲である。歌曲では珍しい場面の移り変わりや、子供らしい旋律も魅力のひとつである。

P.トスティ 暁は光りから *L'alba separa dalla luce l'ombra*(D'Annunzio)

菅原 実華子(4年)

この曲はトスティによって1907年に作曲された。詩はガブリエーレ・ダンヌンツィオによるもので『アマランタの4つの歌』の歌曲集の2曲目にあたり、4曲の中で最も有名な曲である。アマランタとは不凋花とも呼ばれ、永久に色褪せず凋まないという想像、伝説上の花のことであり不死の象徴でもある。冒頭の流れるようなメロディーがまだ夜から覚めやらぬ主人公の気持ちを表し、ずっと夜であればと願う姿は“アマランタ”と同じく永遠性を思わせる。耽美で情熱的な詩に、トスティのもつイタリアらしい情熱的なメロディーを堪能できる1曲である。

## フランス歌曲研究2

指導教員 神谷 明美 / ピアノ 林 順子

C.ドビュッシー 星の夜 *Nuit d'étoiles*(Banville)

上本 杏子(4年)

星空の下で過ぎ去った昔の恋を思い出している情景が、優しくも美しいメロディで描写されるこの曲は、ドビュッシーがわずか16歳ごろまでに作曲されたとされ、18歳の時に発表されました。原詩はTh. de バンヴィル Théodore de Banville の詩集〈鍾乳石 Les Stalactites〉より〈ウェーバーの最後の思い La dernière Pensée de Weber〉からである。

C.ドビュッシー 「フランソワ・ヴィヨンの3つのバラード」より パリの女たちのバラード

*Ballade des femmes de Paris*(Villon)

荒 理緒奈(4年)

詩はフランソワ・ヴィヨンの〈遺言の書第〉144節の後にある「パリ女を歌える」をドビュッシーが作曲した。パリの女の口の達者さを皮肉的に綴った詩である。現代のパリジェンヌの話し上手は世界中の女性の中でもとりわけ洗練されているとの評判であるが、ヴィヨンの時代からも同じようにパリジェンヌの見事な舌先を詩人は讃えている。

「Les Chemins de l'amour」は、劇音楽の挿入歌として作曲された。大切だった人との思い出は、今は隣にいないとも決して忘れたくはない大切な思い出であり、その思い出の小径で今でもその人を探してしまう、という内容である。美しく心淋しさがある歌詞と、ポピュラー音楽のような要素もあり、伸びやかなメロディーでうっとり聴き入ってしまう曲となっている。心の中にしまってある大切な思い出を思い出しながらお聴きください。

## 日本歌曲研究 2

指導教員 沢崎 恵美 / ピアノ 齊藤 香織

山田 耕筰 / 三木 露風・詩 「風に寄せてうたへる春のうた」より

青き臥床をわれ飾る

石塚 紫音莉(4年)

歌曲集『風に寄せてうたへる春のうた』の第1曲目に登載されているこの曲は、山田耕筰の作品の中では珍しい、陶酔感溢れる流麗なメロディが非常に印象的な曲である。その中でも七五調のリズムやポルタメントを使った山田節を感じることができ、春の訪れと熱き恋のときめきをしみじみと噛み締められる幸福感いっぱいの音楽となっている。ここでは、“われ”とは“春”のことを表し、さらに“恋”とも捉えることができるが、青春時代の若き恋を祝福する華やかな一曲となっている

山田 耕筰 / 北原 白秋・詩 鐘が鳴ります

小林 礼乃(4年)

この曲は山田耕筰と北原白秋の名コンビによる作詞・作曲で、1923年(大正12年)に作られた作品です。肌寒い夕暮れ時、恋しい女性が現れるのを切ない気持ちで待っているのを、日本民謡的なゆったりとしたテンポと旋律、そして山田耕筰は10代の頃から姉の夫から西洋音楽の手ほどきを受けていた事や、ドイツのベルリン王立芸術アカデミー作曲科に留学していた事もあり、西洋音楽を取り入れたダイナミックさも持ち合わせた歌曲になっています。

小林 秀雄 / 薩摩 忠・詩 瞳

立田 紗音理(4年)

小林秀雄作曲による「瞳」は、激しい恋に対する我忘の思いを描いている。第一・二連の、激しい恋に瞳を輝かせる様子には、まるで胸の鼓動のように絶え間なく、打ち寄せてくる波のような伴奏が描かれている。第三連では心の支えを失い、音楽はまさに荒れ狂う海(心)を表しているようである。この詩が、得恋か悲恋かは、読み手の解釈によって変わってくる。第四連を経て、この恋が実るかどうかにも耳を傾けて聴いていただきたい。

中田 喜直 / 岸田 衿子・詩 「日本のおもちゃうた」より 海ほおずきと少年

中村 美涼(4年)

中田喜直の『日本のおもちゃうた』の全7曲で構成される曲集の中の4曲目です。おもちゃ歌なので、とてもユニークで遊び心が溢れた曲になっています。岸田衿子の可愛らしく心優しい詩が、中田喜直の美しい旋律でより幻想的な雰囲気を創り出しています。ファンタジーな世界観に浸りながら、どこかで聴いた覚えがあるモーツァルトのソナタを真似たフレーズや、聞こえてくる様々な楽器の音に是非耳を澄ましながらか聴いて下さい。

諸井 三郎 / 三好 達治・詩 少年

奥山 雅子(4年)

この曲の詩は、昭和5年出版された三好達治の詩集〈測量船〉から、作曲は昭和6年にされました。夕暮れから次第に夜に変わっていき、寺院で遊んでいた少年が無邪気に遊びながら家路に向かう情景が現れている曲となっています。流れる様な形の伴奏では、ミステリアスだけれども何処かに美しさを感じさせ、まるで空の色が段々と変わっていく雰囲気が出ています。遊びながら帰っていくこの少年はドッペルゲンガーなのか、それとも少年時代の回想なのか。想像しながらお聞き下さい。

伊藤 康英 / 和合 亮一・詩 「愛しい人へ」より 貝殻のうた

土川 由莉子(4年)

この曲の詩は2011年東日本大震災の直後に福島県の詩人である和合亮一が発表しました。震災後地元の海辺を歩き、見つけた貝殻を机に置いて、作詞をしたそうです。貝殻に思いを寄せ、共に泣き、大切な人を失った悲しみと向き合っていきたい、そんな願いが込められています。本学の教員である伊藤康英の編曲によって作られたこの歌曲は、生命の尊さ、そして大切さを温かく、時には力強く私たちに伝え、思い出させてくれます。